

那領トルキスタンと英領印度のパンヂャブ *Pandjâb* とを繋ぐ可き貴重な連鎖であるカーブール *Kâbouli* 及びバクトリア *Bactriane* 地方を望み見ては、その研究の閉止を頻りに歎息する状態であつたのである。(歎息しても役には立つまいが、損になることもない。) 一九一四年の著述ではあるが、最近極東佛蘭西學院文庫で出版された一冊 (*Art gréco-bouddhique du Gandhâra* 第二卷六三五、六三六頁) を開けると、當時アフガニスタンの頑迷な鎖國に對して、相も變らぬ悲歎を繰り返した所を見て可笑しくなるであらう。實際、印度の西北にあつて幾分陪臣格の地位にあつた此の舊緩衝國が、廣く外部から其の獨立を認められると同時に、自發的に其の國境を開放するやうになつたのは、一方では新しい國際法に依て覺醒し、一方では又聰明進取の青年君主が即位した、そのお蔭に因るものと言はなくてはならぬ。以下の註解をフランス語でするやうになつたのも、國民の爲には公平な教育家を、國家の爲には私心なき探検家を求められる國王が、早速フランスに對して力添へを要望せられたに因るものである。